



日本生態学会 編  
鎌田磨人・白川勝信・中越信和 責任編集

エコロジー講座 7  
里山のこれまでとこれから 所収

# 里山の 文化多様性を 守るために

深町 加津枝



# 里山の文化多様性を 守るために

深町 加津枝



丹後半島山間部，世屋川上流の棚田

日本の里山は、主に集落、耕作地、森林の組み合わせによって構成されており、河川、湧水などの水辺はその重要な要素です。そうした環境で、気候や地形などがもたらす地域の自然と人々の生活、生業、信仰、年中行事などが結びついてきました。ここでは、京都府丹後半島山間部（宮津市世屋周辺）、滋賀県琵琶湖西岸（大津市八屋戸周辺）、京都府亀岡盆地を流れる保津川沿い（亀岡市保津周辺）の土地利用の事例を見ながら、それぞれの里山に特徴的な自然と文化とのかわりについて考えていきます。

丹後半島山間部では、最高標高700メートルほどとなる広大な森林と海とが河川によってつながります。琵琶湖西岸では、標高1000メートルほどの比良山系が琵琶湖湖畔（標高80メートル）から一気に立ち上がる構造となっており、大小の河川が琵琶湖に注いでいます。亀岡盆地では中央を流れる保津川が丹波高原の山々（最高標高800メートルほど）と京都を結びつけるネットワークとして機能しています。このような森（森林）―里（集落、耕作地）―水辺（海、湖、川）のつながりは、

里山のランドスケープとしての構造を理解するうえで不可欠です。そして、森―里―水辺の組み合わせやつながりを考慮しながら資源利用や土地利用の特徴を把握することで、それぞれの里山において特徴的な文化の実像が見えてくるといえます。

## 丹後半島山間部での森の利用

まず丹後半島山間部の明治後期～昭和初期の里山利用を見ていきます。

世屋川流域上流部に位置するこの地域は、積雪の多い日本海型気候で、急峻な山地内に形成された地滑り地形を利用した集落があります。地滑り地形による肥沃な土壌と周囲の山腹斜面からの豊富な谷水や湧水を利用した稲作が中心となり、畑ではソバや野菜などの作物が栽培されました。山すそを利用した焼畑も行われました。森林面積が全体の9割以上を占め、その大半が落葉広葉樹林でした。高標高域にはブナ林が分布し、集落や農地周辺にアカマツやコナラが優占する森林が広がり、小規模なスギ・ヒノキ植林地や

竹林も点在しました。このような森林を源流とする世屋川は、水源として地域住民の生活を支えるだけでなく、海まで土砂を運び、日本三景の1つである天橋立の砂嘴の形成に深くかかわってきました。

耕作地と森林との境界付近には、採草地、陰伐地、茅場などが位置し、

集落での住民の生活や耕作地での生産を支えてきました。茅場は、長くてもつぐなチマキザサが密生した場所です。チマキザサは身近に豊富にある資源であるとともに、積雪前の短期間の農閑期に収穫でき、屋根に積もった雪を滑らせやすい形をしていて、屋根材として使用されまし

た。森林の樹木も、民家の部材として利用されました。アカマツやクリ、ケヤキ、スギ、マダケのほか、ブナ、コシアブラ、ヤマザクラなど多種多様な落葉広葉樹が用いられました。

#### ブナ林を利用する文化

薪炭林は利用の頻度や管理の仕

方により7つに区分できました。

1つめは、ほとんど人手が加わらずに残されたブナ林です。集落から遠距離で到達しにくい急傾斜地などにあり、樹齢300年ほどのブナも生育していました。

2つめは、民家の梁などとして利用された太いブナ材の供給地となった用心山です。100年生以上のブナを用材として育成するため、周囲にある木本やササ類を伐採するなど、部分的な林床管理が行われました。

3つめは、低頻度で炭焼きに利用された共有林を中心とする森林です。集落全体が火災で消失した際などの非常時に現金収入を得るのに使われました。伐採は60〜100年に一度ほどの低頻度、数十アルほどの小面積皆伐でしたが、ブナの大木などは次世代の種子をつける母樹として残しました。

4つめは、薪採取用の「あがりこ」状のブナを中心とする森林です。「あがりこ」とは、地上2〜3メートルくらいの高さで幹を伐採して萌芽を発生させ、それを採取するという利用を繰り返してできる樹形です。このような森林は、尾根部に小面積で



#### 世屋川上流部の集落

急峻な山間地にできた、比較的傾斜の弱い地滑り地形に集落（●）が分布する。冬期は積雪が多い



#### 「あがりこ」状のブナ

繰り返し萌芽を発生させるという、薪炭採取のための利用によりできる樹形（丹後半島山間部）



屋根材として利用されるチマキザサ（丹後半島山間部）

### 用心山の太いブナ

用心山では、樹齢100年以上のブナを残し、太い用材が必要な場合などに単発的に利用する。ササを刈るなど、森林の手入れも行われた（丹後半島山間部）



まとまってありました。伐採周期は、ブナの萌芽生理から見ても合理的な20〜40年でした。

ブナ林はこの地域の暮らしと密接なかかわりがあり、地元の古老は、「ブナ木がようけあるのは、ブナの木は芽を出しますわな。雪があつて

も、他の木より早く芽を出して、大きくなつたんです。そのブナの木を残そう残そうとしました。なんでブナの木を残したかと言うと用心山です。用心に。」と証言しています。このようなブナ林は、「里山ブナ林」と呼ぶことができます。ブナは冷温

帯の天然林の優占種ですが、薪炭利用される他の広葉樹に比べると萌芽力が弱く、萌芽更新が可能なのは多雪地帯が中心となります。また種子生産は40〜50年生からと遅く、年ごとの豊凶の差が大きいのが特徴です。ブナの生態的な特性に見合った



早春の里山  
棚田、チマキザサが生える草地、森林が連続している（丹後半島山間部）

土地利用がとられたことで、里山においてもブナ林が維持されてきたといえます。

### ブナ林以外の落葉広葉樹林

日常的な薪炭利用が繰り返された大部分の森林では、イヌシデ、コナラなど落葉広葉樹が優占していました。5つめの区分は、現金収入のために個人単位で日常的に炭焼きが行われた森林で、集落から比較的遠距離にある私有林が中心でした。炭焼きは年間を通して行われる場合が多く、数年かけて徐々に伐採面積を広げて移動しながら行われ、40〜60年に1回ほどの頻度で繰り返し伐採しました。

6つめは20〜40年の周期で日常の薪採取用に伐採されてきた森林です。炭焼林に比べ集落から近い緩傾斜地など、比較的に利用しやすい立地にある私有林や共有林が利用されました。

7つめは水田に隣接する幅10メートル程の斜面で、水田が日陰になるのを防ぐために10年未満の周期で伐採されてきた陰伐地です。伐採された枝などは緑肥や柴（粗朶）として利用されました。

### 現代の森林利用

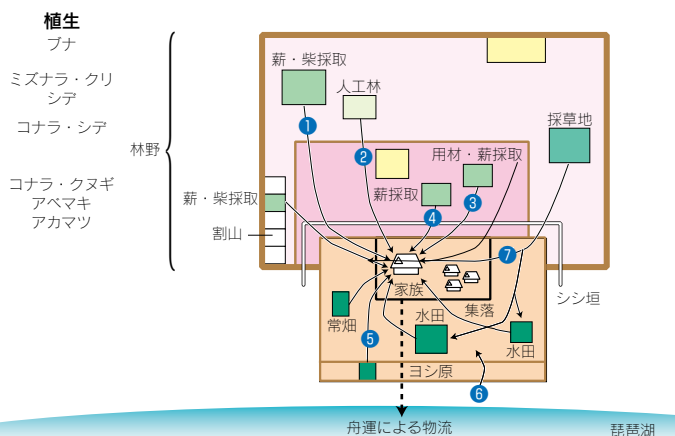
かつては以上のように利用されていた森林は、現代はどうなっているのでしょうか。平成期に入ってから植生調査（世屋周辺）の結果に基づき、森林の利用、管理と植物群落の生態的な特性との関係を見ていきます。

全体で出現した植物は合計149種類でした。すべての区分に共通して出現した植物はアカシデなどの落葉高木が中心で、合計35種類でした。地表高2メートル未満の植物の種数は324種であり、そのうち草本種がおおよそ60%を占めました。優占する植物種の構成はほぼ同様でしたが、出現頻度の低い種の組成や種全体の量的な分布は異なっていました。

里山ブナ林では、ブナが高い優占度を示し、他の区分に比べて種数は少なくなる傾向がありますが、ランの仲間など天然林に特有の植物が多く確認されました。陰伐地や薪採取林など頻繁に伐採される森林ではつる植物、先駆種を含む多くの種が確認されました。また、ササの種類や被度も異なり、頻繁に伐採する森



琵琶湖西岸、八屋戸の位置と周辺の地形



- ① 数反の皆伐。30～40年周期。主に自家用
- ② 数反。必要に応じて販売。構造材
- ③ 数反の皆伐／択伐。15～20年周期もしくは大径木保残。薪として販売。家屋構造材、道具材料など
- ④ 数反の皆伐。15～20年周期。主に販売、現金収入
- ⑤ 屋根材。ほぼ毎年
- ⑥ 藻や貝殻を肥料として
- ⑦ 肥料、飼料、敷料、屋根材など。ほぼ毎年

#### 明治後期頃の土地利用

林でチマキザサが密生していました。伐採された経歴がなく天然林とほぼ同様の特徴をもつブナ林、人手が入る新炭林など、多様な構造、種構成を持つ森林がモザイク上に分布し、地域全体として植物の種多様性が維持されていました。

#### 琵琶湖西岸の森の利用

次に、琵琶湖西岸の里山で、明治後期～昭和初期の里山利用を見てみましょう。

ここは瀬戸内海型気候と日本海型気候の接点にあたり、森林面積が全体の約8割を占め、扇状地周辺にはアカマツ林やクヌギ・アベマキ林が、山麓部にはスギ・ヒノキ植林地や竹林が点在しました。中腹にはコナラ、アカシデなどを中心とする落葉広葉樹林が、山頂付近にはミズナラ林、ブナ林やササ原などが分布しました。

琵琶湖西岸の里山



#### 土地利用

右上の図は、琵琶湖西岸の明治後期頃の土地利用を模式的に示したものです。地形条件から耕作地の面積は限られ、大部分が湖岸および集落周辺にあるのがわかります。山の中腹から引かれた水路沿いや湧水の近くには棚田<sup>たなだ</sup>があります。水利のやや不便な場所は畑で、自家用の野菜や茶などが栽培されました。



琵琶湖沿岸の水田でカヤネズミの巣を見つけた

耕作地と林野（森林と草地在する場所）との境界にはシシ垣が築かれ、山側からシカやイノシシが耕作地に下りてくるのを防いでいます。比良山系の最上流部にあたる急斜面や、森林資源の搬出に使用される道の下側は、土砂災害などを防ぐため伐採が禁じられていました。扇状地の上部や河川付近の崩壊地は採草地となり、緑肥、飼料、敷料採取に頻繁に利用され、屋根材となるススキも採取されました。屋根材としては湖岸のヨシも利用され、琵琶湖からは肥料となる藻やシジミなどが採取されました。

#### 樹木利用

コナラ林、クヌギ・アベマキ林からは自家用、販売用の薪や柴が採取され、一部ではクヌギの植栽も行われました。販売用の薪としては、15〜20年周期での収穫が行われました。上等な薪はクヌギ（「メクヌギ」と呼ばれる）、次いでアベマキ（「オクヌギ」と呼ばれる）、コナラでした。標高500メートル以上に位置する共有林のミズナラ、アカシデなどは、主に自家用の薪や柴となりました。これらは成長が遅く、30〜40

年周期の伐採でしたが、木目が詰まっていたことから、良質な薪として扱われていました。

民家の部材としては、主にアカマツやスギ、ケヤキ、マダケなどが用いられました。

#### 重要だったアカマツ

この地域で特に重要な樹種はアカマツでした。葉、枝、幹、根などあらゆる部分が資源となり、人々の生活を支えてきました。この地域の古老は、「昔は山で松やらを玉にしようと思うと、松を残すようにして他の草をみんな刈ってしまします。昔は松がよく生えたもんです。小さい時はいいけど、背くらいになると山入っても松でしようがないほどです。すると松を間引いて伐ったり大きくなると枝を伐ったりときますわ。それをくくったものです。束にして松葉くくり。」と述べています。アカマツ林の落葉、落枝は焚き付けに使われ、林床に生えた草は刈り取られ水田の肥料や牛の餌となりました。

マツ割木（薪）は、琵琶湖や疎水舟運により湖東の瓦産地や京都などで販売され、大径材は用材や資

材運搬用の車の材料としても利用されました。

さらに、アカマツ林はマツタケや地元で「アブラボン」と呼ばれる美味なきのこや山菜、子どものおやつとなる木の実などの採取地にもなりました。

#### 畦と植物の多様性

この地域は崩壊地形のため、谷筋ごとに特徴的な石が多くあり、庭や棚田の石垣などに利用されました。江戸時代までさかのぼる歴史のある水田が今も残っていて、そうした水田では、土と石垣でつくった伝統的な構造の畦を見ることが出来ます。しかしこうした水田も、昭和後期以降になると、コンクリートで回収されたり、ほ場整備による大規模な斜面に変わるものもでてきました。

平成期に入ってから八屋戸周辺で行われた植生調査で、棚田の畦の構造や管理の仕方では出現した植物の数が多く、構成も異なることがわかりました。この地域の全体では160種ほどの植物が見られましたが、最も多くの種があらわれたのは土の、次いで石垣の畦でした。ほ場



琵琶湖西岸に残る伝統的な構造の棚田。畦の植物の多様性は高く、文化的景観としても重要

整備をした畦では、土の畦の約30%、コンクリートでは20%ほどしか見られませんでした。さらに、コンクリートの畦では外来種の割合も高くなっていました。伝統的な畦は、文化的な景観として重要であるだけでなく、植物の種の多様性にも貢献していたのです。

最近では、草刈り作業の軽減などのため、ほ場整備が進み、コンクリートに変わる畦が増えていきます。また、水田の耕作放棄も進んでいます。放棄した水田の畦よりも、耕作をして草刈りなどの管理をしている畦の方が出現する植物が多くなる傾向もみられています。地元の資源を利用し、長年かけて形成された畦を維持することが困難になっているのと同時に、生物多様性の低下も心配されます。

### 保津川周辺の川の利用

亀岡盆地を流れる保津川周辺の里山では、川を利用した水運が発達し、丹波の木材や食材などの物資が京都に運ばれました。保津川の源流は京都市広河原であり、亀岡盆地のほぼ中央を北から東へと流れ、保津峡を経て京都市の嵯峨嵐山につな

がっており、地域に暮らす人々の生活、生業と深くかわり、他地域との接点となりました。一方、大雨が降ると上流からの流れが保津峡でいったん狭まるため川が逆流し、亀岡は水害の常襲地となってきました。長年にわたる川の恵みと脅威と向き合う中で文化が培われてきたのです。

### 川との暮らし

明治後期～昭和初期の保津川周辺での暮らしを見てみましょう。

この地域では、農業および山と川の仕事の組み合わせによって暮らしが成り立ってきました。集落は川岸の少し高台に位置し、河川の氾濫から守るため竹林に取り囲まれています。集落内には、谷水や湧水などを利用した「イケ」が各所にあり、生活用水として利用され、年中行事とも深くかわってきました。竹林は川沿いにも分布し、良質のマダケは船頭が使う棹や竹細工、防水の材料などとして地元で多様に利用されるとともに、竹筏が組まれ京都に出荷されました。川にかかる橋の中には、増水すると沈む沈下橋、船の航路を維持するための石積みの水



保津川の位置



集落周辺の「イケ」。湧水などを利用してつくられ、生活用水として用いられた

寄せ、航行中の危険を回避するための川作などの河川技術も発達しました。

### 水害と農業

保津川周辺の森林の大部分はアカマツ林であり、そのほかコナラ林、スギ・ヒノキ植林地があり、標高800メートルほどの高標高域にはミズナラ林が分布しました。川沿いにはケヤキやイロハモミジを中心とする溪畔林やアラカシ林もありました。氾濫により肥沃な耕作地に適した土壌が育まれたため、川の両側にある水田では稲作が行われてきました。このような土地は水はけが良く、冬に乾燥するので、稲刈りの後は「保津小麦」と呼ばれる小麦の生産が行われました。水田の多くは、水害を受けやすいところとそうでないところを含む2〜3箇所に分けて所有されてきました。これは、災害で収穫が皆無にならないようにする工夫でした。また、川の土手は採草地となり、耕作地の肥料や牛の餌として利用されました。

### 冬の山仕事

山仕事は主に冬に行われ、アカ



保津川と周辺の集落



Asahi rapids Hodzu river

保津川の筏下り (昭和の初め頃)

保津川の筏下り (昭和の初め頃)

マツの伐採、薪や柴の採取、スギやヒノキの間伐や植林などが行われました。秋にはマツタケの採取も行われました。保津川では筏と荷船を用いた水運利用があり、筏師、船頭として生計をたてる住民も多くおり、筏師は保津川とその支流に伐り出された木材を集めながら筏を組み、川を下って京都まで運搬していました。船頭は、米、小麦、薪炭などを高瀬舟と呼ばれる木造船で運んでいました。周辺の森林や竹林では、筏師や船頭が水運の部材などで用いる、フジ、ソヨゴ、アラカシ、マダケなどが採取されました。

#### 魚類の生物多様性

保津川では春に水田の取水が始まる頃に川漁も行われるため、筏流しは9月中旬から翌年の5月中旬までの8か月間に限定されました。川漁では、アユ、ハヤ、フナ、ウナギ、コイなどさまざまな魚が対象となりました。水田や周辺の水路でも、ビクやモンドリなどの漁具を用いた魚捕りが行われました。大量に捕れた魚は焼いて串に刺して乾燥させ、保存食として食べたり、出汁として使ったりしました。

天然記念物のアユモドキ  
絶滅危惧ⅠA類の希少種



保津川は大きく蛇行しながら流れ、山に沿って流れる区間もあり、今も平瀬、早瀬、淵など多様な水辺空間が残っています。またワンドの存在や水田とのつながりによって多様な水環境が確保されてきたため、全国でも有数の淡水魚の生息地となっていて、ナマズ、コイ、ドジョウなど35種類の魚類が確認されています。その中には、アユモドキ、イチモンジタナゴ、ホトケドジョウ、メダカなどの希少種も含まれます。このうちアユモドキは、雨期の増水でできる氾濫原が産卵に不可欠で、



保津川の筏復活プロジェクトの活動

現在では保津川と岡山県旭川・吉井川水系の2か所に生息するのみとなっています。河川環境や地域の生活、生業が変化する中で、アユモドキなどの多様な魚類といかにかかわり、保全していくのが大きな課題となっています。

### おわりに

里山では地域固有の自然環境のもと、人々の生活や生業を支えるため、時には使い分けながら、時には重層的に、地域の資源が利用されていました。それは、斜面崩壊や洪水、火災などの災害に備え、うまく適応していく工夫でもありました。里山の文化多様性は、それぞれの集落をとりまく地形に規定された森ー里ー水辺のつながりを基本にしながら、多様な資源や空間を利用する中で育まれてきたといえます。

一方、里山に見る森ー里ー水辺の組み合わせやつながりは、今日までに大きく変化しており、全国に共通するさまざまな課題をかかえています。このような中で、丹後半島では多様な豊かな森や水の恵みを活かしたエコツアーや環境教育、食文化

の伝承などの試みが行われるようになりました。琵琶湖西岸では、薪ストーブを核にした里山の利用、石組みを活かした水辺や農地の活用、琵琶湖のヨシの再生に森の資源を活かす試みなどが見られます。また、保津川周辺では観光客向けの川下りのほか、筏復活プロジェクト、天然記念物となっているアユモドキの保全活動などが行われています。アユモドキの保全活動では、治水事業などが進んだ状況では水田灌漑のためラバーダムを稼働することがアユモドキの産卵に欠かせないなど、地元の農業とのかかわりも重要となっています。



「アユモドキ見守り隊」の活動

里山の暮らしを学ぶエコツアー



ます。

里山の文化多様性を活かすためには、自然とともに暮らす中で培われる知恵や技術を継承し、発展させていくことが不可欠です。そして、里山の生物多様性を支えてきた文化多様性という側面からみると、事例を通して見てきたような地域固有の森、里、水辺がもたらす恵みや脅威に向かいあってきた歴史、そして森ー里ー水辺の有機的なつながりをどのように保全し、活かしていくかが重要といえましょう。

## ■ 里山を守る活動に参加したい・サポートしたい方へ

里山の環境を守る活動を行う団体や、関連の情報を発信しているウェブサイトを紹介します。活動拠点や内容、一般の方が参加できるイベントなどが紹介されています。直接活動に参加できなくても、商品を購入したり、寄付を行ったりすることで、活動をサポートすることができます。サイトで知ったことを他の人に伝えたりすることも、里山の保全に貢献することになります。

### 【総合的な情報を得たい】

#### ■ 環境省自然環境局自然環境計画課

<生物多様性国家戦略>

<http://www.biodic.go.jp/biodiversity/about/initiatives/>

<里地里山の保全・活用、里山イニシアティブ>

<http://www.env.go.jp/nature/satoyama/top.html>

<生物多様性センター>

<http://www.biodic.go.jp/>

<生物多様性とは>

<http://www.biodic.go.jp/biodiversity/>

<生物多様性評価地図>

<http://www.biodic.go.jp/biodiversity/activity/policy/map/list.html>

<RDB図鑑>

<http://www.sizenken.biodic.go.jp/rdb/index.html>

<モニタリングサイト1000>

<http://www.biodic.go.jp/moni1000.html>

#### ■ 文化庁

<文化的景観>

<http://www.bunka.go.jp/bunkazai/shoukai/keikan.html>

#### ■ にほんの里100選

<http://www.sato100.com/>

#### ■ モニタリングサイト1000里地調査

<http://www.nacsj.or.jp/project/moni1000/>

#### ■ 日本全国野焼きマップ（岐阜大学流域圏科学研究センター・津田研究室）

<http://www.green.gifu-u.ac.jp/~tsuda/hiiremap.html>

#### ■ 全国草原再生ネットワーク

<http://sogen-net.jp/>

<https://www.facebook.com/sogen.net>

#### ■ 景観生態学会

<http://jale-japan.org/wp/>

### 【『エコロジー講座7 里山のこれまでとこれから』で紹介した地域の活動について知りたい】

#### ■ 宝ヶ池プレイパーク（京都府）

<http://www.kyoto-ga.jp/kodomonorakuen/playpark/index.html>

#### ■ 里山ネットワーク世屋（京都府）

<http://www.satoyama-net-seya.org>

#### ■ プロジェクト保津川（京都府）

<http://hozugawa.org/program/ikada.html>

#### ■ 比良の里人（滋賀県）

<http://www9.plala.or.jp/satobito/>

#### ■ 財団法人大阪みどりのトラスト協会 ゼフィルス森トラスト基金（大阪府）

<http://www.ogtrust.jp/donate/zephyrus.html>

#### ■ 雲月山の草原の火入れ（広島県）

<http://jale.sblo.jp/article/55536700.html>

<http://jale.sblo.jp/article/55738589.html>

#### ■ 芸北せどやま再生プロジェクト（広島県）

[http://npa.shizenkan.info/?page\\_id=16](http://npa.shizenkan.info/?page_id=16)

<https://www.facebook.com/geihoku.sedoyama>

#### ■ ひろしま緑づくりインフォメーションセンター（広島県）

<http://www.h-gic.jp/>

#### ■ 阿蘇草原再生協議会（熊本県）

<http://www.aso-sougen.com/kyougikai/>

#### ■ 公益財団法人阿蘇グリーンストック（熊本県）

<http://www.asogreengrass.com/>



## ■ 執筆者紹介



ふかまち か つ え  
深町 加津枝

京都大学大学院地球環境学 准教授

## ■ 引用・参考文献

- 深町 加津枝, 奥 敬一, 下村 彰男, 熊谷 洋一, 横張 真 (1999) 京都府上世屋・五十河地区における里山ブナ林の管理手法と生態的特性. ランドスケープ研究, 62 (5):687-692.
- 深町 加津枝 (2002) 地域性をふまえた里山ブナ林の保全に関する研究. 東京大学農学部附属演習林報告, 108: 77-167.
- Fukamachi K, Oku H, Miyake A (2005) The relationships between the structure of paddy levees and the plant species diversity in cultural landscapes on the west side of Lake Biwa, Shiga, Japan. Landscape and Ecological Engineering, 1(2): 191-199.
- Fukamachi K, Oku H, Miyoshi I (2009) Changes of Land Use and Vegetation in Satoyama Landscape of Tango Peninsula, Kyoto, Japan: Where are they Bound for? In: Saratsi E., Burgi M., Johann E., Kirby K., Moreno D. & Watkins C eds., Woodland Cultures in Time and Space: Tales from the Past, Messages for the Future. Embryo Publications, Egaleo.
- Fukamachi K, Miki Y, Oku H, Miyoshi I (2011) Distribution of isolated trees and hedges in a Satoyama landscape on the west side of Lake Biwa in Shiga Prefecture, Japan: A case study from the viewpoint of biocultural diversity. Landscape Ecology and Ecological Engineering 7(2): 195-206.
- Horiuchi M, Fukamachi K, Oku H (2011) Reed community restoration projects with citizen participation: an example of the practical use of Satoyama landscape resources in Shiga Prefecture, Japan. Landscape Ecology and Ecological Engineering, 7(2): 217-222.
- 亀岡市文化資料館 (2009) 保津川のサカナのハンドブック. 亀岡市文化資料館, 京都.
- 亀岡市文化資料館 (2009) 保津川下りの今昔物語. 亀岡市文化資料館, 京都.
- 亀岡市文化資料館 (2013) 丹波亀岡・風景へのまなざし. 亀岡市文化資料館, 京都.
- 亀岡市史編さん委員会 (1998) 亀岡市史資料編 第5巻 亀岡の民俗誌. 亀岡市.
- 亀岡市史編さん委員会 (2004) 亀岡市史第3巻 近代・現代. 亀岡市.
- 国際連合大学高等研究所/日本の里山・里海評価委員会 編 (2012) 里山・里海—自然の恵みと人々の暮らし. 朝倉書店.
- 三好 岩生, 深町 加津枝, 大岸 万里子, 奥 敬一 (2007) 丹後半島山間地の2集落における地形的要因からみた水利利用形態と景観形成. ランドスケープ研究70(5):683-688.
- 森本 幸裕, 白幡 洋三郎 編 (2007) 環境デザイン学. 朝倉書店.
- 日本自然保護協会 編 (2005) 生態学からみた里やまの自然と保護. 講談社.
- 西村 幸夫, 中井 祐, 伊藤 毅 編 (2012) 風景の思想. 学芸出版社.
- 湯本 貴和 編 (2011) 里と林の環境史 (大住 克博 責任編集). 文一総合出版.
- Watanabe T, Okuyama M, Fukamachi K. (2012) A review of Japan's environmental policies for Satoyama and Satoumi landscape restoration. Global Environmental Research, 16 (2): 123-135.

エコロジー講座 7  
さとやま  
里山のこれまでとこれから 分冊版 2  
さとやま ぶん か た よう せい まも  
里山の文化多様性を守るために  
にほんせいいたいがっかい  
日本生態学会 編  
かま だ ま ひと しらかわかつのぶ なかごしのぶかず  
鎌田磨人・白川勝信・中越信和 責任編集  
ふかまち か つ え  
深町 加津枝 著

2014 年 3 月 16 日 発行

発行 日本生態学会

製作 株式会社文一総合出版

2014 ©The Ecological Society of Japan

Printed in Japan

本書の一部または全部の無断転載を禁じます。

## ■ 日本生態学会とは？

日本生態学会は、1953年に創設されました。生態学を専門とする研究者や学生、さらに生態学に関心のある一般市民から構成される、会員数4000人余りを誇る、環境科学の分野では日本有数の学術団体です。

生態学は、たいへん広い分野をカバーしているので、会員の興味もさまざまです。生物の大発生や絶滅はなぜ起こるのか、多種多様な生物はどのようにして進化してきたのか、生態系の中で物質はどのように循環しているのか、希少生物の保全や外来種の管理を効果的に行うにはどのような方法があるのか、といった多様な問題に取り組んでいます。また、対象とする生物や生態系もさまざまで、植物、動物、微生物、森林、農地、湖沼、海洋などあらゆる分野に及んでいます。会員の多くが、自然や生きものが好きだ、地球上の生物多様性や環境を保全したい、という思いを共有しています。

毎年1回開催される年次大会は学会の最大のイベントで、2000人ほどが参加し、数多くのシンポジウムや集会、一般講演を聴くことができます。また、高校生を対象としたポスター発表会も行っており、次代を担う生態学者の育成に努めています。学術雑誌の出版も学会の重要な活動で、専門性の高い英文誌「Ecological Research」をはじめ、解説記事が豊富な和文誌「日本生態学会誌」、保全を専門に扱った和文誌「保全生態学研究」の3つが柱です。英文はちょっと苦手という方も、和文誌が2種類用意されているので、新しい知見を吸収できると思います。さらに、行政事業に対する要望書の提出や、一般向けの各種講演会、『生態学入門』などの書籍の発行など、社会に対してもさまざまな情報を発信しています。

日本生態学会には、いつでも誰でも入会できます。入会を希望される場合は、以下のサイトをご覧ください。「入会案内」のページに、会費、申込み方法などが掲載されています。

<http://www.esj.ne.jp/esj/>

